女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百七拾號

當府內無郵稅

一册六錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 170. July 13th, 1889.

EDITORIAL:—Consecration. No. II.

LEADING ARTICLES:— Japanese Taste.

CRITICAL NOTES: —"Namuamidabutsu."

MISCELLANEOUS:— "Darkness is the Onward Path." "Gift to a Beloved Child." "A Surmise is Respect to Womankind."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES: — Edmond Burk.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

第百七十號目錄

社說　犧牲献身(第二、三)

論說　日本人の嗜味(藤の屋)

批評　紅葉山人の「南無阿彌陀佛」

雜錄　前途暗黒○批評眼○愛子へ贈り物○女界の推察○「日本の言語」を讀む○茶話三

見鑑　兵士の宥罪(しきた一)

史傳　エドモンド、ボルク(自然道人)

小說　あろのん物語(美妙齋)○眞才子(麻溪)

寄書　姿の字を用ゆべからず(鴨郁散士)○飛で火に入る夏の蟲(北越樵姉)

開書　名古屋の視會に付(天空生)

新報　監獄の改良○哲論者の政論○浮雲○眞美復興の兆○俗僧をして還俗せしめよ○道は必らず行はる○英國主相再たび女權論を主張す○英國女子二政派奴隷解放者の末期○第二の聞えざる解放者○第二レヒツト夫人○婦人の目方

片々　女子の弔詞、○米國公使の夫人○外十五件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Among many other movements for the petition concerning monogamy, the ladies of Yokohama have held a meeting last week to elect a Committee of six persons to draw up the petition.*

(2) *A Shizuoka Newspaper reports of a new association in that town which makes it a business to gratuitously attend to drawing up of petition, constitutions for societies, etc.; to deliberating with and counselling those who are in public offices; to writing for those who desire to contradict the statements made is periodicals; and to responding to the requests for speech, as political, scientifical and religious, the last being restricted to those of buddhistic character.*

(3) *A party of women headed by one Ei Kageyama is to come together in Osaka, to deliberate on the subject of Woman's Rights. Some of them are said to be of vulgar origin and others to be of very rude and masculine manners.*

(4) *The "Bunko" is soliciting for essays on the subject of womanly beauty and The Y.M.C.A. of Tokyo has requested a description of the ideal woman. We hope that they may obtain many an interesting essay.*

(5) *The musical school in Tokyo will admit 20 pupils next term.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百七十號
明治二十二年七月十三日發兌

社說

○犠牲献身

二〇 人間眞實の祈禱

利と仁義と吾人其の孰れを先にすべき。或人は曰く人世の萬事悉とく利に根す、利益あらざるところ人は決して動くヿなけんと、如此き論者は彼の吾人をして獨立感泣せしむるの美行をも、悉とく擧て利害の問題もて解釋し去らんと欲するなり、故に其の人に教ゆるや云く、汝曹先づ尤も多く自ら利せよ之れ自ら獨立するなり、汝曹亦た尤も大に人に利せよ之れ尤も多く自から利する也と、此に於て貪慾の人盜跖バラバの人は其劣等なる信徒となり、聖人義者孔子ソクラットの人は其の高等なる信徒となる也、所云る貪ぼれるものと義捐するものとの相違は、只だ廣く思ふと狹まく考ふるとの別のみ、必竟悉とく是れ利益崇拜の信徒にあらざるはなしと云ふ。詩に云く、他人心あり予れ之を忖り度ると、彼の功利論者の解釋は果して能く吾人が心を忖度したるもの乎、儻し吾人は利せざるよりも利せんヿを希ねがう、故にもし他の事を一樣なりとすれば、吾人は先づ他を利し亦た自からを益し、成るべく多く其の利益あらんヿを欲して敢て特更らに其の利益の少なからんヿを祈るものにあらず。然れども吾人々生の行ひ悉とく此の功利論に根すと云ふものあらば、吾人は啻に其論の亂暴なるヿを責むるのみにあらず、寧ろ大いに其の無禮なるヿを怒らざるを得ず。抑そも吾人は豚にあらず、亦僅かに他に賞賛せらるゝヿを樂しむの犬にも非ず、實に吾人は各自に一個の至靈至聖なる良心を懷抱する彼の禽獸類外の人間にてある也、自から省みて吾が思ふ所ろを解析するに、固より亦た利を念ふの念なきにあらず、然れども總べての吾が思ふ所ろ悉とく此の利根に發すと云ふは吾れ斷じて自から許すを得ざるを覺ゆる。吾れ人の貧しきを見ば惻然として痛たむ、吾が衣を剝きてだに之に與へんヿを欲す、此時敢て自から利するの心なき也、但だ再考し來るとき或は自利を思ひ或は愛惜の念ひを發す、元より之れ初回卒然として起り來るの衷情にあらず。吾れ亦た人の義を爲すを見れば感奮して立つ、吾れ一身を忘れて亦た之に加わらんヿを欲す、此時敢て自から利するの心あらざる也、但だ再考し來るとき或は危さに恐ぢ或は損害に懼るゝの念ひを發す、元より之れ亦た最始に抽起

し來るの眞情にあらず。左れば吾が尤も内ある人は常に他の貧しきに泣き、苦しきに胸打ち、悲しきに慟哭す、願くは之が爲に自利を獻じ、一身を棄つるも尚ほ之が爲めに益せんことを祈るものなり、但だ何如なる寒人子、吾に一種の外ある人あり、常に此の内なる人を妨たげて其の仁義の行なひを制す、耳語して云く斯ては一身の利益とあらず、呼びて云く斯ては一身の利益とならず、遂に絶叫して云く斯ては一身の利益とあらずと、則ち外より之を壓し、强迫し、密閉し、多くは以て内人の勃出することを許さず、此に於てか吾人の爲す所ろ往々にして自利に切あることあり、啻に爲す所ろのみならず思ふ所ろも亦た往々にして自利に切なることあり、則ち論者あり此の外行外思を觀察して人間の行思一切利根に發すと云ふ、吾人は其の論の因て來る所ろを承知すると共に、亦悉とく此論解を認許することを得ず、吾人が全身心豈に徹頭徹尾に於て如此きものならんや。人あり友人を殺ろす、其の殺ろしたるや實に殺ろしたるなり、其殺ろすに當てや實に念ひたるなり、然ども其何の故に斯の如く念ひ如此く殺すに至れるやの情實を質せば、實に此彼が止を得ざるの塲合に立ち、自ら防禦するの必要に迫りて頓急卒忽として瞬時に之を切りたるなりと云ふ、而て其平生友人を思の愛は固より極て深かりしと云へり、此時に於て罪狀を判するもの之を何如にすべき、又之を論評するの道義學者は抑そも之を何如にと云ん、吾人は其の殺人罪を認ため得ると共に亦た深く其の衷情を察せざる可らず、吾人は必らずしも彼が友愛に切ありしことを疑がふ能わざる也。此時に當つて判事道義學者等詳びらかに之を判決し、先づ其の罪を定むると共に併せて彼が毫も友人を愛せざりしことを斷ずるに至らば、彼必らずや服せじ、彼は其罪に服す、然れども其の衷情に屬するの判定に至りては決して服する能わじ。彼の汝ちが行思を悉とく利に根すと宣言するの學者に向かつて、吾人が然らずと斷答するの情亦た蓋し如此けん。吾人はダルヰンが云へる如く一種の動物也、然れども亦たキリストの云へる如く一種の天の子也、吾が一半は肉に屬すと云へども更に一半は靈に屬せり、吾人は果して墮落したるものか若くは亦た未だ發達せざるものか、吾人未だ之れを知らずと云へども只だ吾人が半身の極めて卑劣なることを覺知す、然れども吾人は亦た其の救われしか赦されしか天の導きに引かるゝものなるかを辨知せずして只だ吾人が半身の極めて高潔なることを覺知す、故に吾人は今ま悉とく美なりと云

はず、只だ半ば美なりと知る、吾人は今ま完美なりと云はず、只だ遂に完美に達し得べしと信ず、此を以て吾を豚の如く犬の如くに解釋し去りて得意たるものに會すれば怫然として怒らざるを得ず。吾は子供なり然れども大人たるを得べし、吾に動物の痕跡あり然れども亦人間なり、吾は地を踏めり然れども天を望めり、吾は省みる然れども亦た前途の悠々として遠大なるを認知せり。

ジエルサレムの殿堂に聖所の聖所あり其の尤も深き所ろに居す、大和の宮室に九重の九重あり其の尤も奥まりたる所ろに存す、而して人間の極聖重九の所ろには無形靈淸の良心安座するを覺とる、其聲極めて微なり、然れども吾が心の耳の之を聞くは百雷の轟ろきよりも强よし、其の賞罰は極めて隱微なり、然れども之が一賞を受れば万人の誹りも顧みるに足らず、若し夫れ之が一誹を受るときは萬人の賞めも安んずるに足らず、故に良心の吾に於けるは王の臣民に於けるが如し、最大終後の威權悉とく之より發す。

而して吾れ此の良心の望む所ろを聞けば、良心は吾が一身の利益を棄てゝ專ぱら他を利せんとを欲す、其の安んずる所ろは正義を爲せし時にあり、其樂しむ所ろは犧牲と爲りし時にあり、只だ身を献げて善に與みし、義務を盡して人間と爲り了したるの時是れ卽はち其の尤も幸福なるの時なり。　左ればは何如なる人も若し靜かに其の良心の告ぐる所ろを聞けば、必らずや亦た如此き敎へを受けざるものはあらず、彼の功利論者と云へども其の自然に反るときは自づから正善潔白の行ひを慕ひ、彼の盜跖と云へども其衷心に入るときは亦た犧牲献身の美行に敬服するの情あり、故にたとひ惡魔の界ひに入るとも其の賛美するの聲は神を賛美するの聲なり、たとひ亂虐暴戾の仲間に入るとも其の王と爲れるものは尤も信義仁心あるものなり、天上天下行く所ろとして誰か仁義を慕ひ、利を卑しまざるものあらん、必らずしも利を卑しむにあらず若し仁義に對比するときは必らず先づ仁義を敬賛せん、思ふに此れ人の至性終望あり。

此故に古來の歷史中懦夫をして尙ほ立たしむるものは巨萬公の致富談にあらず、命を棄て義を守りたるの潔行にあり、吾人藤吉郎の尾州より突現したるに驚歎す、然れとも楠氏の笠置山に敕を受けて出るに比らぶる時は物の數あらず、假令ひ其一は偉大なりとも、吾人が之を見ると只だ富岳の一夜にして起れるが如く驚ろく、故に其死するを痛むと亦た琵琶鄉

の一夜にして陷たる如く感ずるに過ぎず、寧ろ此れの起ると忠誠、死すると凄絶、たとひ其事稍小なりと云へども、譬へば年少敗家を受けて事未だ成らず半途にして忽ち死するの人を見るが如し、吾人が最奥の情に於て感ずる所ろ眞とに切なるに異なる。宋丞相囚はれて風簷に書を讀む、歌つて曰く、天地正氣あり、人に於ては浩然と云ふ、沛乎として蒼溟に塞がり、時究の節乃はち見ゆと、嗚呼節を守りて屈せざるの蘇武、賊を罵るの顔常山、出師の表に泣ける諸葛亮の如き、若くは堂々義を守る淸麿、櫻に削る高德、遺訓を守り如意輪堂に歌を遺しつる正行の如き、若くは心友を殺ろすブルータス、王を首はねたるクロムエル、飢へて道を傳へたるポウロの如き、何ぞ其の絶淸絶美なるや、吾も人も聖人も盜賊もそれ何人か之を望み見て其烈義に感歎せざるあらん。

夫れ人、肉の奴隷と爲りて諸々の慾に走るとあり、然れども其の之に向ふて走るや恰かも虹を望んで走るに似たり、遠く望むときは燦爛たり、然れども之に到達するとき顧みればすでに美色なきを覺とる。我れわが心に言ひけらく來れ我れ試みに汝を喜ばせんとす汝ち逸樂を極めよと、嗚呼是もまた空なりき。我は大いなる事業を爲せり、我は諸々の勞苦によりて快樂を得たり、然れども我れわが手にて爲したる諸の事業をよび我が勞して爲したるものを顧みるに、皆空にして風を捕ふるが如くなりき。われエルサレムにありてイスラエルの王たりき、我れ心を盡し智慧を用ひて天が下に行はるゝ諸々の事を尋ね且つ調らべたり、我が日の下に作すところの諸々の業を見たり、嗚呼皆な空にして風を捕ふるが如し。日の下に人の勞して爲すところの諸々の働らきは其の身に何の益かあらん、空の空、空の空なる哉、都べて空なり。但だ夫れ吾く之を人の爲めに盡し、道の爲めに盡し、神の爲に盡し、吾が衷心に欝勃たる義腸を發表して、初めて能く我が思ひを安んずるに足る、吾は求むる所ろありて善を爲すにあらず、善を爲ざれば安んぜざるなり、人に幸はいせんとを欲す敢て自から利するにあらず、人に幸はいするの行爲即はち是れ吾の尤も自然なる所ろなり、人間萬事悉とく僞わると云へども、母の其子に於るの愛豈に僞はりならんや、即はち吾の眞情は皆如此くして犧性獻身せんとを欲す、王侯と云へども人の爲に與へんとを欲し、乞食と云へども尙ほ衣を脱がんと欲す、錦繡を衣ると云へども尙ほ安きを得ず、襤褸を纏ふと云へども古道の顏色を照らすを覺ゆ、人間の人間たるところ豈に自

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

利にあらんや、只だ身外の爲に犧牲となるとき最とも爽快至樂なるを覺ゆる也。エホバよ願はくは我が語ばに耳を傾むけ我が思いに御心を止め玉へ、わが王よわが神よわが號叫の聲を聞き玉へ、われは我が淸くなり高くなり正しくありて人の爲に善を行わんヿを祈れば也。

三。獨立したる奴隷

吾は人に仕へんヿを祈る、人に利せんヿを祈る、人に使われんヿを祈る、人の爲に働らかんヿを祈る、人の爲めに死せんヿを祈る、吾が世に來れるは人を使わんヿにあらず、人に使われんとて也、人の主とならんヿにあらず、反つて其の僕べたらん爲め也、人の頭に案手せんヿにあらず、寧ろ其足を洗わん爲め也、即はち吾は世に於て王侯豪傑と爲らんヿを欲せず、只だ尤も貧しき尤も憫れなる尤も卑しまるゝの人物と爲らんヿを祈る也。

然りと云へどもクリストの一身を殺ろして万人の爲に犧牲たるや之によりて其の魂しひ奴隷となり、人の爲に全く屈服して其自由を失なひたるにあらず、其の手は水を灑ぎて能く弟子の足を洗ひたりき故に能く其の先生たる也、其の顏ばせは能く兵卒に唾きせられたり、故に能く其の救主たる也。吾等が人の爲に一身を獻ずるは吾が靈魂自から好みて之を爲す也敢て束縛せらるゝにあらず、吾等が人の爲に犧牲となるは吾が良心の自から祈禱して之に行く也敢て强迫せらるゝにあらず、故に獻身犧牲は吾が我を落すものにあらず吾が我を殺ろすものにあらず、否な如此して初めて能く吾れの我れを自由ならしめたるもの也。

左れば吾人は人間として何如なる人間にも服するヿ能わず、たとひ王侯と云へども我を曲げしむるヿ能わず、たとひ滿天下の輿論と云へども我を屈するヿ能わず、吾は終始本末を徹して常に我れ也、世界幾億の人ありと云へども相列ぶときは高さ數尺の相違もなけん、吾等は平等に平列して同高同距離の天を戴だくもの也、左れば吾等は自然の性によりて人の爲に死せんヿを願ふ、然れども此の死するときは吾れ我を守りて死する也、天下何人かよく吾を靈魂上の奴隷と爲すものあらん。

吾人は帝王と乞食と盜賊と聖人と總理大臣と門番とを比較するに、人間として其の何如なる相違あるを見ず、吾人が本性は皆な同樣に之を一視して之を同樣に愛親するを得、たゞ其の相ひ異る所のものは、彼等が身中に存する大道の聖なると

然らざると多きと少なきとの相違のみ、故に吾人之に向つて或は拜し、或は罵り、或は服し、或は斥ぞけ去る、人に向つては彼此相同じ、人中の道に向つては一々に異る。

モハメット叫びて曰く、汝等啞像を拜す彼れ神にあらず、見よアルラーを見よ、アルラーの外に神なしと。ゾロアスター說きて曰く、汝等、汝等の祖先が信奉したる眞理より彷徨ひたり、故に吾れ天の源泉より新たに之を持來すべしと。モゼス宣言して曰く彼の吾在るは汝ち等に吾を遣はせりと。クリスト道を傳へて曰く我は道なり眞理なり生命なりと。吾人皆な之に服し亦た之を信ず、然れども彼のマホメット、ゾロアスター、モゼス果して何人ぞ毫も吾人に異なるなし、彼のクリストと云へども抑そも何人ぞ毫も吾人に異なるとあらけん、吾人は人の子たるクリストを崇拜するものにあらず況んや彼のモゼス、ゾロアスター、マホメットをや、更に況んや此等の人子聖人豫言者に及ばざるの人をや、吾人は常に人間を崇拜するにあらず、只だ人間中の大道を崇拜する也、其人如何ん只だ是れ吾人同等の人のみ、只だ夫れ彼が大道を懷抱しエムポデーし、之によりて人化しパーソニフハイし存するところに至りては吾人謹んで之を崇拜す、吾等が寅るゝ所ろは上帝のみ、吾等が服する所ろは大道のみ、故に上帝の氣を禀け、大道を懷くの人に服す、決して人としての人に服するに非ず、人は是れ吾人が兄弟也、同類也、仲間なり。

吾人は忠義を好む、人情を愛す、献身犧牲を美とす。故に王侯を見るや極めて謹しむ、之れ惣べての權の神より出でざるなきとを知るがゆゑ也、故に又た人を愛す、之れ惣べての靈魂の神氣の宿する所ろなるを知るがゆゑ也、故に又た身心を犧捐せんとを祈る、之れ惣べての義は大道の存する所ろたるを知るが故也。嗚呼人間の至情は利他にあり、人間の光榮は道を守るにあり、人間の安心は献身犧牲にあり、人間の献身犧牲は上帝大道の意思存する所ろに向ふにあり、吾人は自由なり、獨立なり、滿界滔々たる平民一族中の一平民なり、天覆ひ地載する四風悉とく神領とあれる坤輿上の一神子也、奴隷たらんとを望む而も吾が心鐵の如し、足を洗はんとを望む而も氣節爛々たる太陽の如し。

陳平は賢なりと雖も魏倩を須ちて後ち進み韓信は奇（まれなる人）なりと雖も蕭何に賴りて後ち信せらる此故に孔子は管仲を賢なりとせずして鮑叔を賢とし子產を賢なりとせずして子皮を賢とす人を薦擧するの明鑑かつて之を論ぜり

論説

○日本人の趣味（其二）

藤の家主人

斯くの如く最も美術心に富めりと自任する人すら大抵は二三外國人の尤もらしき日本美術論に得意となり或は西洋尊奉主義の熱度に浮かされて我が長を説き他の短を責むるに過ぎず。されば其人々の嗜好より出でたる坐敷の裝飾を見るに從來の日本風極めて淡泊なるか或は不雅なる西洋風頗る蕪俗たるなり。其下品に到れば一閑張の唐机に仔細らしき帙入の唐本を並べ怪しき落款の薯蕷山水を綸子仕立にして得意となり若くはクロームを金縁の扁額に入れ勸工場仕込の九谷まがひを棚上に陳列して揚々たり。斯の如き人より見れば古九谷も古備前も明珍の作も運慶の刀も宗眠の彫も殿司の筆も唯古き汚なきものとのみ見へん。金岡甚五郎は其名の高きに眩惑せられて感服し今の九谷伊萬里は金色燦爛たれば其美しきを賞美するのみ、眞正の妙味に到ては茫乎たり。金岡の馬夜る野に走り甚五郎の龍夜る池に飲す、元より癡人の妄説取るに足ねど其神怪は能く見人をして迷信せしむ、九谷伊萬里は其金色の他に黒く煤ぶりたるに異なりて美しきを賞づるなれば縱令九谷伊萬里ならずとも東京製の廉物極めて俗醜を帶ぶるも又愛を維に足。是等は最も笑ふべきに似たれど今の人は大抵此類にして所謂趣味を知る人は極めて少なし。西洋の美術は精緻美色にして縱令美術を解せざるも精緻美色丈けはよく是を識別すべし、故に西洋好の人は其精緻美色を楯とし日本美術の人は精緻美色を毀る。共に知らざるの論にして精緻美色必ずしも妙味あるにあらず、もし美術は精緻美色にして足れりとせば五彩を塗りちらしたる田舍の社をも見事なりと賞美すべし。日光の殿閣のみが立派なるにあらず、奈良の古堂縱令金銀五彩の美なしとも一種の妙味自ら他に存せん。第一回繪畫共進會に狩野派の某藤王閣の圖を出品したり、精巧美彩毫末も遺憾なく、屋瓦の壞れたるさまなど最も細密を極めたれど美くしと云のみにて貶して申さば繪看板の如く妙味さらになし。又第二回全共進會の寫眞派の某五重の塔の圖も最も精細を盡し大小長短の割合コムパスをもて量りたるかと疑はしむるほどなれば恰も番匠が引たる繪圖の如く氣韵少もなし是等はよし精緻にても美彩にても美術の上より曰へば尊ぶべき事かは。然ども此氣韵と云或は風致と曰ふは元より定議を下すべき樣なければ日本主義の人は是を以て金城鐵壁となし眞理と云るダイナマイト砲をも見事此脆弱なる氣韵の二字を

もて防ぎ得べしと考へ、西洋畫を見ば直否となく一言に氣韻に乏しと斷案を下し彼れ寫眞派なりと嘲ける、焉んぞ知らん寫眞にも美術に協ふと協はざるとあるを。されば縱令寫眞派に屬するとも……寧ろ寫眞なりとも美術に協ふものなれば强がち氣韻に乏しきにもあらず。最も美術に暗き日本主義の人々は勢よく出來たるを氣韻に富りと考ふるもの多きが如し。もし然らんには大ひなる錯誤にして美術を腐敗せしむべし。王獻之が落筆牛と成りしも曹不興が誤點蠅と作りしも畢竟通神の名手が筆なればこそ出來しなるに平凡の手腕を以て是を擬し落筆誤點ならでは畫にあらじと考へ終には山は饅頭の如く川は素麪の如くなりて西洋主義の人々に笑はるゝ種となりしあれど、最も美術に協はずと曰はるゝ畫山水にても初めより饅頭素麪にはあらで自ら畫の六法なるものありて決して無茶苦茶に唯勢よく筆を下するにあらず、畫品に曰く畫山水則貴平石老而潤水淡而明泉石分平高下山川辨其遠近野逕縈紆雲煙出沒千里江山歸于目下盡其妙也と。されば今日平手畫工が作りし畫山水を見て山は饅頭なり川は素麪なり遠近明暗大小の差なしといふは日本主義の人々が西洋畫を見て氣韻に乏しと毀ると同樣にして日本名匠の手に成りし畫山水を見し事なきなり、もし見し事ありしならば其人繪事に暗く西洋畫を賞美するは唯精緻美色に眩惑せられ或は西洋文明を慕の餘り譯もなく西洋畫を愛し或は西洋主義の人々の偏說に雷同せられしなり。我れ曾て日本繪を愛翫する米人某を訪ひ東西美術何れか優ると問しに何れも長所あり輕々しく評すべからずと答へたり。是れ實に趣味ある人の說にして、今日の如く和畫ならば饅頭山水をも珍重し洋畫ならば石版畫でも金線の額に入れて樂しむは各々一方を偏愛する癖にして趣味ある人にあらざるなり。是も美術を研究する人々にして其奉ずる派の長處を說くは兎に角、さらぬ人が繪事を知らずして洋畫は云々和畫は斯々とおのがじゝに其長處を述べたつるは瑪瑙の瑕瑾を喋々しく毀りて明石珠の美色を賞づるが如し。尤とも明石珠こそ瑪瑙より尊しと迷信するなれば其說は無理ならねどかくては美術心に富めりとは云ひがたからん。ベーコン曾て云ひし如く一度嫌惡せしものは二度と賞美する事決してなく習慣はよく嗜好物を作るなれば吾佛尊との理屈にて明石珠を龍の珠ほどに尊ぶものもあらん。スペクテートアに博士プロウトの著書より引用して曰く昔し嘗かある男あり時計の時を報ずる毎に數るを以て樂となす然に誤りて狂はし時

計は端なくも止りしに此男その後は自ら時を計りて打たしめて例の如く數へたりと、是れ最も笑ふべきに似たれども今の日本人の趣味は例へば此馬鹿者と全じく最も得かしき偏愛說をもて美術を論ず豈眞正の美術心に富めりと云ふべけんや。酷に云へば劉邕が瘡痂を好み權長孺が爪甲を好むと全樣にして嗜好と曰はんよりは寧ろ癖と云ふべし。

批評

○紅葉山人の「南無阿彌陀佛」　南仙子

我れ紅葉山人の作を喜び又是に服す。人は曰く山人の作は立案尤も可なりト。然れども我が喜び且服する處は立案にあらずして寧ろ文章にあり。色懺悔の如き或は京人形の如きもし立案の上より曰へば共に推すに足らず、唯「百花園」中の南無阿彌陀佛に於て立案の最も奇絶なるを見る。山人は西鶴其頑を喜び常に是を誦諳すると聞く、故に其作の如き立案に力を用ざるにあらざれども往々文字に使用さるゝの傾向あり。京人形或は色懺悔に於て見るも脚色は文字の爲に作られ文字脚色の爲に動かざるを知るべし。然るに此南無阿彌陀佛は大に固有の病癖を免かれたるに似たれば此一點を以てもまづ山人を稱揚して可なり。蓋し山人が常に苦しむ處は文字の推敲にあり、自家の伎倆を顯さんとするには艶麗或は悲慘なる文字を臚列するにあり、西鶴團水の俳文調を擬するにあり。是れ又一種の技能にして咎むべきにあらねど若し小說として論ぜんには幾分の非難を容るゝの地あるべし。されば山人の最も苦しみ又最も得意とせしものは煩雜なる美にあらざれば錯綜せる哀を見るのみにして折角の苦心は水泡に歸する事多し。色懺悔を見よ、字々句々一として等閑に筆を下せしはなく悉く經營慘澹の跡を見ざるはなく、若し後世に到れば——二三百春を過ぎたらば今日英米學者のセキスピヤを註釋すると全一の結果を生ぜん。彼は言語の變遷より文法の差違とあり是は典故に富贍にして博聞者唯充分に解すべし。又文庫に連載せる倭昭君を見よ、字句文格頗る古雅にして宛として馬琴以前の文字あり、彼の太宰純の產語に於けるが如くもし紅葉作となからんには西鶴の逸文あらんかと疑がはしむるに足る。山人が西鶴に精しく文字に巧なるは欽すべしと雖ども其長ずる處は即ち疵瑕にして文字の爲に立案のまぐれたるを傷つくの憾あり。かゝれば山人が常に得意として自から任ぜらるゝものは却て不得意とせらるゝものに劣る、近くは此南無

阿彌陀佛をもて之を知るべし。南無阿彌陀佛は恐らくは山人得意のものにあらじ、又山人が刻苦せしものにてもあらじ。色懺悔京人形或は倭昭君に比して文字の凡俗なると章句の平易なるをもて山人が力を用ひし事少なきを徴すべし。然るに此力を用ひざりし事は能く平生の疵瑕を免かれ立案に於て大に前の二三に勝る、よし勝らざるとするも文字の爲に束縛せられずして自然の妙處を見るべきなり。今南無阿彌陀佛の長處を擧げんに、

第一　平俗の文字を使用せし事。是れ或は山人に於て最も不本意とする處あるべけれど艶又哀の文字を澤山に並べるは脂粉を粧ひて美を示し喪服を着して哀を顯はすが如く表面上の艶又哀に過ぎざれば感仰の力も薄く且つ俗醜に陷り易くして高雅の質に乏し、もちろん同じ粧飾にても種類ある事は猶ほ西京の舞子と田舍の意氣がり女との相違の如くなれど西京の舞子すら瀟洒たる東京ものに及ばず、又支那人が泣男を排列に加へて聲を上げて泣かしむるも肅然たる燒香式の極めて哀しきに如かず。蓋し粧飾をもて主とするものは往々僞の文字となりて信を脱すれば讀者の衷情に徹貫せず、色懺悔が淚を以て主眼としたるに關らず――字々句々皆淚に緣あるを用ひたるにも關らず悲哀の度割合に薄き所以は即ち是なり。聞朝の咄團十郎の伎を聞き或は觀るもの皆涕泣す、共に俗談平話にしてひねつた文字もなきによく人を動かすを見れば縱令常の紅葉山人の筆の如く謐らずとも充分に人を動かすに足らん。我れ曾て有名なる講談師某の講談を聞きしに彼れ少しの才學を賴みて七五の馬琴調を列ね得意に是を讀みしは大に哀怨の度を薄ふして片腹痛く思ひたり。山人が文字を弄するは是れとは異ありて前にも云ひし如く宛たる西鶴と思はるゝほどなれど、夫すら多少哀怨の度を薄ふし粉黛の爲に天性の美を失ふ心地す。此南無阿彌陀佛ばかりは山人が力を盡さゞりし故に大に平常の弊を免かれ不用意の所に却て自然の美妙を存す。

第二　文字悉く信なる事。我れ此頃の小説を見るに大抵は遊戲半分に筆を弄し。役にも立ぬ駄洒落或は樂屋落をならべて頗る得意の躰あり。中にも硯友社員の文字は概ね此通弊に陷り作者獨りで樂しむも讀者には少しも解らざる文句など麗々しく列ぬる事常なり。唯紅葉山人は此病を脱し、わけて此南無阿彌陀佛は頗る眞摯に出來たり、是れ頗る稱揚すべき點にして讀者の感情を動かすに最も力あり。例を擧げんに、

「大阪中寺町蓮香寺といふ淨土寺に新佛あり。あまく〳〵しき土饅頭。木臭き塔婆に墨にじみて、春夢淨晃信女明治二十二年四月二日。四五日前までは此世の人――なほそれよりもいぢらしき事あり、裏を見れば。俗名津波梅女行年十八才――えエしあしたり」。（一回六十二頁）

殊に專ぱら風情を寫せし巧妙は讀者をして嗚咽せしむる事多し、是紅葉山人の長ずる所なれども南無阿彌陀佛に於て最も其手際を見る、例へば、

「花吹雪の中を辿りて。結立の髮に翳せし花鳥の繪扇。たしか用簞笥の抽斗に。その後いれしまゝ。再び持て外出すべき今の躰にあらず」。（一回六十四頁）

「殘る三分は花婿の顏を見て、兩親に疎まれし娘。行末長くいとしがつてと。吾口づから賴み。わが手づからまづいながらも丸髷に結ひ申し。つめ袖を着せ申し。連立て先のお袋樣のお墓へ參つたら。いかばかりか。草葉の影のお喜びは。定めて石塔もゆれるであらう。それを土產に東京へ立歸り。世話好の姉に叱られて」。（一回六十六頁）

「此日はいつより早く暮れて。夜もいつよりは賑かに。火影も花やかに耀きけるが。十時頃よりお梅の容躰かはりて。最期は明朝の露を待たぬやうに見ゆれば」（四回六十九頁）

是等は冷淡に讀めば何の事もなきやうなれど細密なる風情を流麗に寫したるは他の摸擬すべきにあらず。

第三　人物を顯出する僅少なりし事。南無阿彌陀佛の人物はお梅由之助姉弟唯二人のみ。乳母お由は一回に出でたれど是處發端の類なれば全篇に重きを置かず、其他兼次郎及繼母の如き姉弟の口より出して顯はさゞるは作者の筆腕非凡なるを見る。中にも繼母は大關係あるものなれば尋常の作者ならばお梅の不幸を現はにせんが爲に繼母を顯出するならんに、その拙策を襲はざりしは流石に山人のお手際と申すべし、且つ三回六十九頁に「奧の間に手に取る樣に繼母が姦しき聲また光を叱ると見える」とあるは間接に繼母の意地惡き根性を寫したるものにして山人の用意最も周密なりと云ふべし。我れ聞く、狂言作者が臺帳を作る時稻荷町連中の掃溜を作らんが爲に關係もなき按摩夜蕎麥賣御殿女中下郎侍等を顯出そる事芝居道の常なりと。是等は事情の然らしむる處なれど頗る煩はし、然るに小說を作るもの是等をよしと考へしにや、暗雲に無用の人物を顯出する事多きは何故ぞ。南無阿彌陀佛は輙ち此通弊を兇かれ得たり。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

第四　大阪言葉を用ひざる事。南無阿彌陀佛は大阪の咄あれど對話は凡て東京にせしは或人は難ずるもあるべけれど我れは却てあまあか半熟の「おます」詞を使用して讀煩はしきよりは優れりと覺ゆ。我が國の戯作者は常に諸國の方言を使用するをよき事とし、田舍者の詞は必らず田舍にせざればならぬと思ふこそ嗚呼なれ。勿論是も必要ならざるにあらねど專ら此瑣事に力を盡し——力を盡すも甲斐はなく東西南北の詞を混仝して往々人の笑を買ふは馬鹿々々しくもあり。されば南無阿彌陀佛がおとあしく東京詞を使用せしは最もよし。

以上四者は南無阿彌陀佛の長處にして我が推奬する所以なるが爰に人情にあらぬ處あり、例へば乳母が病中の主人を跡にし歸るは何故か、それ程の急用ありとも覺へぬに。第一回に「お孃樣の死目にも遇ひませずはるヾ東京からこんな悲しい物を見に參りました」とあれば、死目に遇はんとて東京を出發して日をくれせしが如し。さすれば愈々理屈に合はぬ咄よて、大阪を立つ時明日をも知れぬ病人を跡にして東京に歸り、日曜日毎に書信をすべしなど、優長な約束をするとは。死目に遇ひたくて再び東京を出立する位ならなど初めから止まらざる。又お梅が如何に手紙の深切にほだされしと云へ縱母の薄情に忍びかねしと云へ見ず知らずの兼次郎を戀慕するとはあまりに輕卒にして爲永時代の娘かとぞ思はる、せめて賴もしく思ふ位に止めて置きたくありし。次に由之助、是も分らぬ、第一回に姉の指圖に從つて乳母に禮を述ぶる處は十三にはチトおとなく見ゆれど第四回に指環の屆け先を斯人なるべしと悟るは頗る似げなき事なり。かヽれば肝心の人々かく矛盾して折角の文字も傷くる處あるやに似たり。然れども是等はなほ稱すべし、最後に作者の書翰を出すに到ては奇を好むの甚しき大に惜むべし。作者の考にては物語をして愈々實事の如くならしめ以て讀者の感情を益々動かさんとせられしあらんが、第一回に乳母より聞きしを錄せし如くありて此手紙には兼次郎自身の語りしを編みしやうにあるは前後相違して頗る面白からず、宜しく割愛すべし。まづは上出來の文字にして群小說を壓倒するに足らんか。

雜錄

○前途暗黑

しのぶ

一寸先きの闇きこそ人の幸福なれ、吾等知らざる地に旅すれば樂しみあらん前途悉とく洞見し得られんには亦た逆旅の快

ちよさも無けん、何人ぞ愚かに運命を占なう、若し幸運來るとあらば吾知らざる時其忽然として來るの幸わいなるに若かず、若し不幸の運とあらば吾其の來るを兼てより思ふは一層の苦しみあらん、嗚呼未來を見がたきの盲ひは慈悲深き惠みにこそ、斯て吾等只だ天の區劃せし區域にて働らくのみ。英傑の死すると鳥雀の落ると大地の破裂すると水泡の消え行くと、同じき眼こを以て一々に察觀するは人間の及ぶ所ろならじ。吾等の罪過は高ぶるにあり、自から天與の區域を脫けて思ふまじき境界を考へ、分に越へて信仰の量の外に苦慮するぞ艱難の初めならめ。波の怒るは水を清まし風の叫ぶは氣を潔ぎよくす、今日の變異は皆な萬世の幸わひにて天地何すれば徒らに凶事わらんや。萬物皆是れ一躰の一分、宇宙は其の形にして、神は其靈なり、吾等盡さずと云へども自然は之れ一つの器械、吾等見ずと云へども萬事は之れ一つの進向、たとひ悟りがたくとも不調は是れ整調、判じがたき單一の苦痛と云へども亦た惣界の券。

○批評眼

漁窮子

文明と共に學者の眼は遠くなれり、遠識と云はんか、又小さくなれり、近眼と云はんか。然るに其の遠識と共にいよ／＼細かく見、其近眼と共にます／＼深く觀察し得るに至りしは、批評の眼こなるべし、思へらく此頃敎育時論に掲げたる短評の如きは、此の眼力の特に味を得たるもの歟、云く、

時事新報は主婦の如く、日々新聞は娼妓の如く、每日新聞は藝妓の如く、報知新聞は處女の如く、日本は姑婆の如く、東京新報は女學校の生徒の如し。朝野新聞は變幻出沒、評する所以を知らず。○東京高等女學校の評判、は驟雨俄に至り、屋梁に雷落わりしが如く、茨城師範學校の騷動は、磐梯山の噴火の如く、文部省の方針は、暴風大雨後の修繕の如く、大日本敎育會の總會は、世人の注意を惹かざること、對岸の火事の如し。○日本人は岩垣松苗の國史略の如く、國民の友は賴山陽の日本外史の如く、經濟雜誌は安積艮齋の通語の如く、輿論新誌に至ては、某氏の國史攬要の如し○敎育時論は歐陽永叔の如く、敎育報知は竹聲の如く、「文」は朱熹の如く、敎育評論は蘇子由の如く、東洋學藝雜誌は韓愈の如し、○政治家は狼の如く、敎育家は羊の如く、學者は牛の如く、商業家は犬の如く、農業家は馬の如く、華族は鹿の如く、官吏は猫の如く、紳商は狐の如し。

視を學ぶ者は先づ輿薪を見、聴を學ぶものは先づ撞鐘を聴く、　列子

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○愛子への贈り物

みどり

金錢は猶ほ車の如し、之を運轉するによりて初めて効德あるなり、何如に巨萬の富を積むとも、只だ之を積みて置くときは石瓦に異ならず、用ゐずんば將た何の價ひあらんや。昔し日本の有樣は萬づを貯ふるの風なりき、學者は才を用ひず、智者は智を用ひず、之を用ひず只だ學問したり智慧があると云ふ丈けにて通用したる、此れ封建制度萬事沈滯のゆえに由る也、斯る時勢に於ては富も亦た用ゆるの地なく、只だ之を庫に積み箱に藏めて夫にて尙ほ巨萬公なり金傑なりと稱するを得たりき。　左れど今日の活世界に於ては最早此論法を許さず、如何に萬卷を讀みしとも一の新議論なきものは學者にあらず、如此くたとひ萬億の金を有すと云へども用いて事業を爲さゝるは富者と稱しがたし、流れて而して川あり、動いて而して風ある如く、働らきて初て學力あり金力ありとは云ふなれ。　一家を理する豈に天下の經濟に異ならんやたとひ一圓の貯蓄と云へども遊ばす可らず。若し他に用なくんば宜しく驛遞局に預くべし、假りに十圓にして之を預けたりとせば五年にして十二圓半となり十年にして十五圓となり二十年にして二十三圓となるべし。又若し每月十錢づゝ預くるとせば一年にして一圓二十二錢三厘となり、十年にして十四圓八十三錢二厘となり、廿年にして三十七圓三十錢となるべし。左れば子一人を擧げたる喜びを祝ひて以后每月一圓づゝ貯金し之を働かすとすれば、此子二十即はち人に嫁し若しくは世に獨立するとき、凡そ三百七十三圓五十錢の貯金は母の小遣のこりとして與ふるを得べし。　大切なるは儉約なり、儉約せし金を大切にするは働らかすにあり、働らきて殖えざるものなし、特に金錢を以て然りとす、兼好法師曰く錢あれども用ひざらんには貧者と同じと。

○女界の推察

是空子

洋服を着し金の鎖を垂れ寶玉の指環を穿ち腰を蜂の如くしたる立派な貴婦人、燒かけた煙草入を前に置てホク／＼と泣く、吾れ之を慰さめて曰く、貴婦人よ何を以ての故にお泣遊ばす、彼れ愁然として曰く、先生御覽遊ばせ、ホク／＼、妾が同じく教授する某女學校に同輩の女教師あり、性質甚はだ惡しく、何故か妾を怨みて少との過ちだにあれと祈り居らる、妾を睨み玉ふ眼この蛇の如きは確かに腹中の邪念を現じ、其口に吐かるゝ言葉の蜜の如きはキット妾を迷はし殺ろさんとの工みなり、左れば陰になり陽になり表になり裏になり、只だ妾を

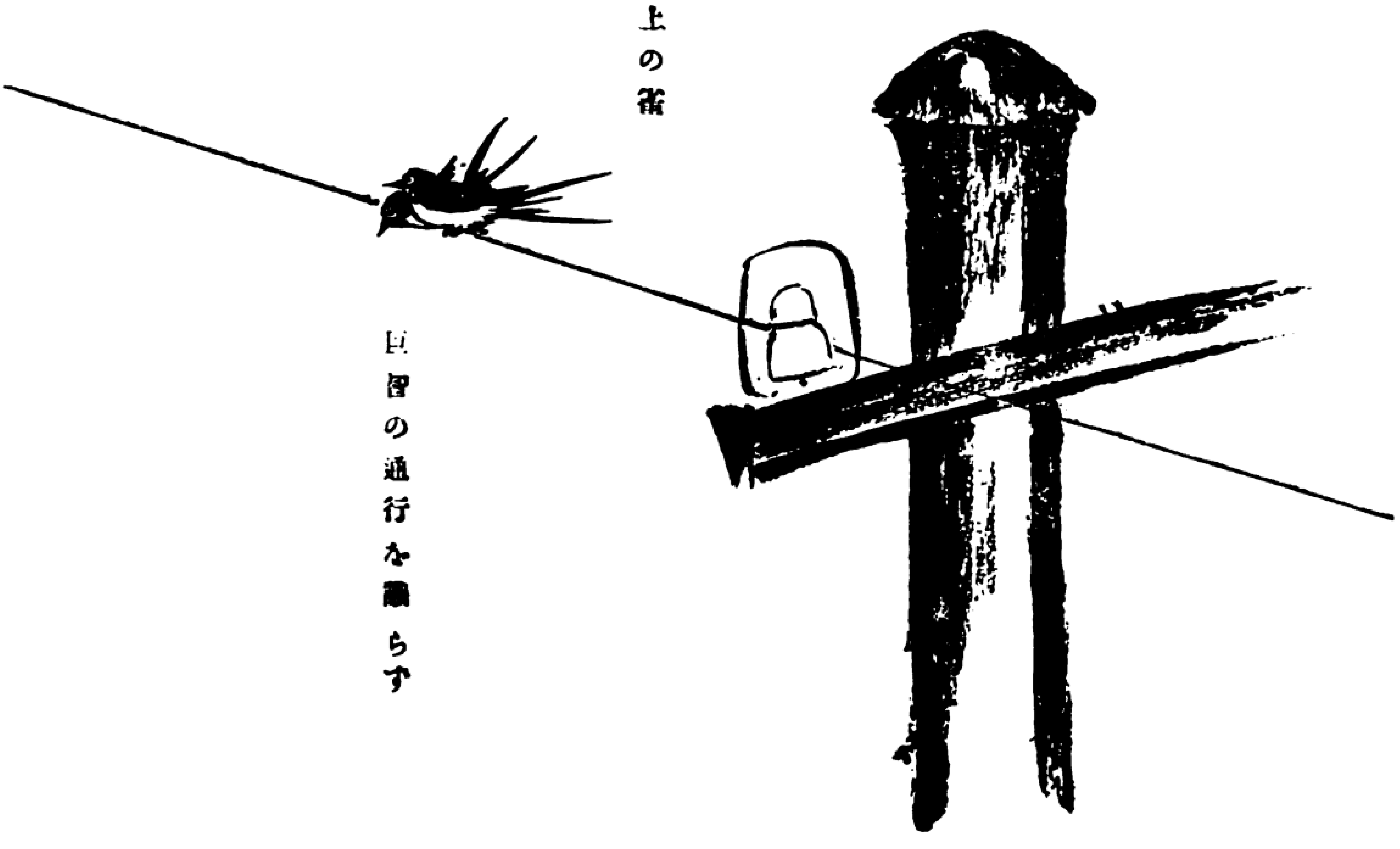
苦しめんとのみ遊ばす、ホク〳〵、之れ御覧遊ばせ此の煙草入れは、ホク〳〵、妾が此頃ろ恩賜の金を貯へ趣向を凝らして造らせしもの、造りてのち三日立ぬに留守の間に火鉢へ投込み、此の通りに燒かせ玉へり、妾に怨みありとも此の煙草入に何の怨みありませうぞ、怨みなき煙草入をすら斯爲さるれば、怨まるゝ妾は抑も如何なる目にか會ひ申すべき、すでに斯く現はに妾を苦め遊ばすからは、此上は命ちすら取らるゝかも知れず、迚もお勤めが出來ませぬゆへ辭職したし、先生何卒お推し下さい。チイ〳〵ボロ〳〵。吾れ先生平として喃々（但し聞えぬ如く）くりかへし操返し說得す。而して后にて聞けば、此は貴婦人の留守中、煙草入が自身と轉ろげ落ち、我儘に自から燒けつゝありしを、小使が注意して救ひ上げ、心切に半死の負傷者を机上に置きしなりと分りぬ。

〇「日本之言語」を讀む

北村門太郎

女學雜誌第百六十八號に日本之言語と題する一文章を見たり、八木氏が筆記に關る佐藤寛氏の講義なりと披露せられたり。余は佐藤氏が如何に博學なるかを疑ひ得ず、然れども「日本之言語」なる、其奇怪なる立論は余をして不幸にも一言を呈せしむるを致せり。

第一に氏に驚きたる說は、日本語を以て英語に比し而して彼にも勝れりと斷言せられたる活眼の程なり。曰く「或時代に於いて歐洲の各人種が英土に乘込み其國語を亂し、國語も是れが爲めに定らざりし(畧)是れ則折衷語にして眞の英語と云ふに非らず(畧)獨り我國の如きは然らず皇統一系の政にして外國に比類なく殊に日本は海を隔てゝ維新前迄は別に交際したる國もなく獨立獨孤でありたれば國語の亂るゝ所以なり…………



電線上の雀

巨智の通行を[illegible]らず

言語則ち國語は言葉より成立ちて談話の爲め及文章の爲めに用ひらるゝ者なる可し、故に國語に完、不完を見んと要せば、會話及文學に於て其實際を見るを得べし、則ち佛人は世界に於ける會話の得意者にして史家も曾て佛人の進歩は會話より英人の開化は信仰より來れりと論ぜし程なり、又た英國は十五世紀以後文學の大壯觀を呈出せる土地にして、其今日に於ける文學の勢力も決して他に讓らざるなり。

何が故に英語は不完全なる、曰く、折衷語なればなりと。英語は實に各國の語を折衷したるが故に今日の完全を致せしなり、歐洲各國共に希、羅、二帝國の遺産を配ちて自語を形成せしを、英語は機會を得て其兄弟語より自家を補ふの利益を持ちたりしなり。成程十五世紀頃迄の英人は沈默にして家居する事多く、社交上にて辯舌を要する事少なく、從つて言語も亦た進歩してあらざりしに相違なし、然れども折衷語以後の英人は是に反して宗教上にも政治上にも社交上にも最も多辯を要する活潑なる英人なり、其言語や巧になれり、其文學や一足飛に進歩したり、蓋し折衷語なればこそ世界に於ける第一等の文學家を出し、世界に於ける文學上の最大壯觀をも相躍がしめしなり。凡文學と言語とは兄弟より親し、文學は常に言語を惑かんとの心を以て進み、而して文學の進むによりて無論言語は進む可く、言語の進みに因つて文學も亦進まずんばあらず。然らば文學の最高度に達したる英國と今ま其搖籃の中にある日本と其言語を比較し得可き筈あるや。余は常に嘆息す、各國ともに有らざるなき時が獨り我にはあらず、是なきに種々の原因あらん、然れども言語の不完全なる事其主因ならずして何ぞや。又た氏は日本の國語を以て獨立獨孤にして純一なる者なりと言はるれど其は大なる誤見なり、日本語と雖英語と同じく折衷語と呼ばる可し、純粹の日本語なる者は全く無くして支那語の一半と日本語の一半より和合し來れる一種の言語が言語界を成り立たし居るなり、余は折衷語を進歩語として取ると雖氏が日本語を以て純粹語なりと言ふに至りては驚くより外はなし。

余は日本の言語の多くの不完全なる所を見るなり、文學世界に一英雄の起りて我國語の爲に盡す所あれかしと望める事久し、余は儀式的、機械的に日本語が英語よりも冗長に馬鹿らしく發達し居るを知るのみ、其他に於て英語に勝るの點を見る能はず、且つ英語は其兄弟語より折衷せり、故に折衷の利益を領したり、日本語は全く異種なる支那語より折衷して發達したるが爲め其弊害は實に少からず、加之固有價の中にありし多少の美味も是が爲に障害せられたり、文章の書方の如きも漢文と和文とは死なり凡べて迷ふが如く崩するが如き形跡の多少存在するを見るにあらずや。氏は曰く「書物を以てブックと云ひ一つ品が二つ或は三の名を持て居ると云樣な煩はしき語が出きたら云々」是れも亦た驚く可き言なり、學友さまなびのともの二語幷び立ちては不都合なるや、英人が一二の佛語を交へて談話するは不都合なるや。要するに佐藤氏は所謂國粹家の一人なる可し、衆人が是を改良し、或は進歩せしめん事に苦しめるに、國粹家は傲然として唯我を視ずる事常なり、余も亦國粹を好めり、然れども耕やさゞる可からざるの地を充分耕やされたりとして鍬と鋤とを用ひざらんとするを好まず。今や我國語は文學と共に猛進せんとす、文法燦然とし、談論の法大に開け修辭の學も亦た非常に進むの日刑して待つ可し。

○神代の頭巾

三千世界の眞中、其國のみやこに生をうくるは、三樂の外のたのしみと思ふべし、片山家の者ども、かないろといふ器物を見て、これはなにゝなる物じやといふ、これは神世のとき火の雨がふつた、そのをりかづいたづきんじやといふ、一人の者つるをとらへてこれは何の爲じやといふ、それはぬけぬやうに緒をつけたといふ、口をとらへてこれはとゝへば、耳のきこゆる爲じやといふ、それならば兩方に有はづじやがと

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

いふ、わるひがつてんじや、ねるときの爲にかたつらにしておいた。

○手をとる業平の倅

さる卒忽なる醫者、さかい町の花車がたをする役者煩ひはち卷してねて居たるに、かの醫者初めてたのまれ脉をうかゞひさてこなたハ月のさハりあるか又ハとゞこほり有かとゝふ、病人聞いていやわたくしハおとこで御座る、男に月のさハりハめづらしいおたづねといへば、醫者なむ三寶とおもひ、ぬからぬかほにておとこならばはじめから男で御ざるといひたいものでハないか。

○興がる法師

夕部すゞしき椽ばなにすだれまきあげ、思ふ友どち餘念なく碁をうちしに、田舍の出家見物せられしが、あるいハ目をつぶそうの打てとらうかの、又ハはねかけうの、ころさうのといひければかの出家終に碁といふ物ハしらず、何乎おいさつをいひたく思ひ、とかく碁はあらひことばさへいへばよいぞと心得ゐる内に、又こゝを切ませうといふ、時にかの出家、またしやれ、きらふよりハ其石めをふみたをさつしやれといふた。

兒籃

○兵士の宥罪（其二）　しきたへ

アレーン猶も言葉を次ぎ涙を浮べて讀み出るよう

御承知の如くジエミー、カールの母とは同人の一子に付て十分の世話致す可き旨約束いたし候ひきされはジエミーが病ある時は出來可き丈けは介抱も致し候、しかるに不圖隊伍に呼び出され出陣いたさねばならぬ塲合と相成候へどもジエミーは病後の事とて身躰思わしからずそれ故に兒は一の荷を背ひ居候そが上にジエミーの荷をも負ひ申候、たそがれ時迄馳け足にて進み候ため二つの荷は堪へがたき迄に重り我れも人も疲れ果て中にもジエミーの如きは時々手もて輔け候わずば屢々倒れんかとも思わるゝ程に候ひき陣營に達し候時は全く疲れ果て如何ともいたしがたく折悪しくも其夜の守兵はジエミーの務め候番なれば氣の毒と存じ私事ろれにかわり申候しかるに疲れの爲め、父上よ、たとへ鐵砲の筒口を頭腦を當てに狙わられ候とて起きも得ざるほどに熟睡いたし時の遲れ候も知らず居り候。

オウンはいと嚴粛に神に感謝すべきかな、ベニーは心なく眠るよりなる者にはあらず。

しかして情狀を酌量ありて今日私しに僅かなる宥罪を與へられ候事を則ち御元へ一書拜呈致すべきの許しある事を司令官が申され候よし兵士等の物語り居候、さりとて司令官を決して／＼御怨み被成まじくこれも職分にて是非なき事に御坐候もし職務上の關係だに無之候はゞ喜で罪を赦さるべくジエシーのかわりに死し候ようなる事は萬々有之まじくと存ぜられ候

母上は如何御くらし被遊候か妹のベニーは如何になど考へ出で候折は身も世にあらぬ思ひいたし候、何卒十分に我がなきのちも御なぐさめ被下度せめてもの心やりに私し事男らしき死樣いたし候事を御言づて奉願候、神よ我れを助け賜へ、たえしのぶ事のいとかたきに。今ぞ別れを告げ參らす、父上よ。（下畧）

○○○○○○○○○○○○○○

其夜半家の背戸口が開くと見れば、そのうちより忍び出しはブロッツム露置く小草踏み分けて大路の方へと步み行く、步むにあらず飛ぶ如く時々空を打仰ぎ兩手を胸に押あてゝ祈るが如き風情しつひた走りにぞ走りたり。二時間ほど經てブロッソムはミルデホルトに到着せり（鐵道列車停車場）。そも何故にブロッツムは父にも告げず唯一人家をば走り出でにけん

ブロッツムは兄ベニーが生命の旦夕に迫るを聞き思ひ堪へず父の枕頭に一邊の書置をのこし、兄が越せし書を携へワシントン府に趣きて大統領リンコルンに面會なし兄の命を許されん事を請願せんと思ひたちかくは忍び出でけるなり。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

○音樂學校

左は過日音樂學校卒業證書授與式のありしとき校長伊澤修二氏が演述されしものゝ大意なり有益の論あるに付請ふて左に掲載す、

今日は文部大臣並に次官閣下來賓紳の方々に御光臨を辱うし茲に卒業證書授與式の典を擧ぐる事を得ましたのは誠に本校の光榮と申す可き事で御座ります此度の卒業證書授與式は本校が東京音樂學校となりて以來始めて本科の卒業證書を出すに至りたる事で御座りますれば此好期に際し數分時間御來臨諸賢の清聽を煩はして聊か本校從來の沿革幷に事業の大要を申し述べたいと存じますさて本校の起りは元音樂取調掛と申しまして今より大凡十年の昔明治十二年の十月に文部省內に置かれた者より始まりまして其後四年間は內外音樂の異同幷に古今の樂典の沿革等を研究致しまして遂に明治十七年の二月に至り其取調の成績を報告して先づ大略の所音樂上の理論と實地とに就て定見を立て時の文部卿たりし大木閣下に申報したる事でありまして即ち此事は音樂取調成績申報書として既に世の中に公にした事で御座いますれば茲に再び詳說は要せぬ事で御座りますが沿革を申述ぶる序に其の大略を摘んで一言御耳に入れたいと存じます抑も音樂と申す者は人の性情の自然に出づる者で御座りまするが古今東西其大本の原理に於ては聊か違ふべき道理もなく又實に殊なる所はない者で御座ります例へば音樂に於て宮商角徵羽の五聲の相關する理法の古今東西に通じて異なる所なきは恰も數學に於て數理の相關する道理が古今東西の差異なきと殆ど一般なる者と申して宜敷御座りませふ夫故に本邦の雅樂にある呂旋と律旋との二旋法は「ギリシヤ」古代の音樂の旋法中に存し本邦の俗樂に在る二種の旋法もまた「ギリシヤ」古代の音樂の旋法中に存したる事は誠に明かなる證據に依て論證いたし毫も疑ふ所は無い次第で御座ります只今日の歐米の音樂と本邦の音樂との異なる所は音樂の進步の度に於て異なる

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

計りで決して音樂の大本に於て異なる譯では御座りませぬ今又數學の例を假りて之を說明しますれば我邦に於て和算のみを用ひて居りました頃は或は點竄とか極形とか云ふやうな者は有りても今日用ふる西洋流の代數とか或は幾何學とか申樣な者は御座りませぬ事でありました併し昔の點竄も今日の代數學も昔の極形も今日の幾何學も別に數理に於て異なる所がある譯ではなく唯今日の代數學や幾何學は昔の點竄極形などに比すれば其方法が進步して遙に精微に至りた計りて御座りましよう音樂の旋法に於ても其通りで今日の西洋の音樂も昔「ギリシヤ」時代の音樂も今日の日本の俗樂なども其音律の原理に於て違ふ所はなけれど只其進步の度に於ては西洋の今日の音樂は「ギリシヤ」時代より羅馬時代を經近代に至て進步してあるのみ我邦に存する所の旋法は依然として恰も二千年前「ギリシヤ」に在た頃の者と殆と同じ者でありまするので即ち其進步の度に於て大に異なる次第で御座ります此事は既に申しました通り今より五年前に報じたる所の申報書にも詳しく申て御座りますれば今又此上貴重の時間を費す事は致しませぬ。斯く內外の音樂に就て其異同の點を考査したる上は自然の結果として如何なる音樂を以て我國家に施し教育上の裨補をなそうかとの點に進みませうそこで夫れは其音階の種類に就て講究するに音階には要するに二種が御座りまして一は長音階と申し一は短音階と申します其の長音階に屬する所の樂曲は槪して勇壯活潑の氣を帶び短音階に屬する所の者は柔弱淫靡の風を帶ると申す事は學理上に徵しても實地上に驗しても誠に明瞭で御座ります此理由が御座りまする故に普通教育に施す所の音樂は槪して長音階に屬する所の物を用ひ以て勇壯活潑の氣象を養ひ且又信實忠愛等の情を養はなくてはなりませぬ今日まで本校に於て普通教育に用ふるに適すべき樂曲となす所は多く此種類の物を取りました事で御座ります悲哀の情も愛憐の心も音樂上に無くて可なりと申す事では御座りませぬが是等は人生生長の後にこそ始めて其趣味を知る事なれども決して幼年の教育に必要なる者では御座りますまい然るに若我在來の或る種類の樂曲の如き終始悲哀の氣を帶び或は云ふに忍びざる感情を引き起すが如き者を用ひたらんには其結果は如何で御座りませうか寧ろ音樂を學ばしめざるを優れるとするに至ろうと思はれます。

前條申述べました如き次第故前四年間の調査を終へたる後は凡て學校に用ひ教育上に益を爲す可き所の唱歌音樂の撰定に其力を盡し遂に今日に至りまして過ぎ來し昔を顧みれば最早殆ど十年の星霜を經たる事で御座ります倂其成績は如何と申しますと音樂の如き者は其成長實に徐々たる者で御座りまして中々一朝一夕にして其効を見る可き者では無く其十年の星霜を費して數多の生徒を教育したるも能く其卒業に至らしめたる者は僅に六十五人にして其中男四十七人女十八人のみで御座ります併しながら此男女六十五人の者は今や殆ど全國の各府縣に在て音樂教育の職に從事し全國の各都府至る所殆んど唱歌の聲を聞かざる所はないと申して宜しい程に至りましたのは又望外の結果とも申す可き事と存じます凡人心を感動し精神を發揮するに至大至强の感動を有することは唱歌に優れるものは御座りますまい古人も歌は天地を動かし鬼神を泣かしむるの力ありと申し古來聖主賢相の音樂を以て治國の要具とせられたるは今又爰に申し上げる迄の事も無いと存じます夫故斯樣な事例は省きまして先日下直に我國に不完全乍らも行はるゝ唱歌に就て見ても例へば貴長子弟の教育に唱歌を用ひ之が爲めに猥褻の歌謠を頓に一掃したるの實例もありませう天長節の朝たに當り全國各都府數十萬の生徒等が我　聖天子の聖壽萬歲を祝し奉り忠君の情は海內に溢れ山河も遠く相應じ天人共に相和するの盛意を表したることもありませう紀元節に當りては全國數十萬の生徒が遠く二千五百有餘年前日本開始の大帝の洪德を敬慕し無限の感情を唱歌に發したるとも御座りませう又　聖天子の臨幸に當りては萬口一齊に君が代を唱ひ無量の愛敬を表したるは實に諸君の耳底に猶存する所で御座りませうされば今日まで我等音樂に從事する者が聊か國家の爲に盡したる微忠は早くも既に其結果を現はさんとするに至りて實に感喜に堪へざる次第で御座ります又來年は本邦未曾有の一盛時にして全國中より議員を招集し集議院を開かるゝの大典が御座りませう此時に際し全國民一致合同の意志を一結し以て　帝室を尊び國家を愛するの感情を顯揚し全國一齊に此盛時の祝意を表するは音樂唱歌に依らずして他に何物が御座りましようぞ。(以下卒業生に對するの說相略す)

史傳

○エドモンド、ボルク

自彊道人

今まやマコーレー一流の文章大ひに行わる、而してマコーレーの文は深くエドモンド、ボルクに淵源す、抑そもボルクは正義の論雄にして堂々闊歩道を踏んで懼るゝなきの士なりき、彼國會に臨むと廿有八年、正論口を衝て出づ、特に其の米國獨立に關するの辨說及よびワーレンヘスチングに對する彈劾の如きは、啻に英國會をして天に輝やかしめたるのみ而ならず、更に人類の價格を昇して一層高の地に進めたり、彼が雄辨は正しきが故に雄辨なり、彼が文章は懼るなきを以て強剛なり、

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

日本現今の文學界に其流の行れ來らんとするは國家の大幸と云ふべし。

英國の批評家某氏嘗てポルクの文章を評して曰く、吾人はポルクが一篇の文章を擧て其心狀を認了する能わず、正當に之を確知せんと欲せば彼が書きし所の惣てを擧げざる可らず、蓋し其の文章の全躰初めて其の一個の雛形となるべし、他の文章家演說家に至りては所論大率ね同形なり、故に吾人もし其一篇を讀みて、如何ある躰裁にて白述し、如何なる趣きにて引例し、如何なる方法にて結合論證するやを認たむるときは既に足れり、彼が百篇の文章は只だ此の習慣を百變したるに過ぎず、其問題の異なるに隨つて別に大ひに異なる所あるを見ざる也、ポルクに至ては甚はだ然らず、彼は問題の異なる每ゞ彼自身亦た全變し、其心裏に欝勃たる貯蓄を括出して每篇に異樣の躰を附す、彼が觀念は僅少ある實事より成立つにあらず又此僅少なる實事を只だ種々に利用するにあらず、彼が智識の鑛山は深智の無盡藏にして、其の心量の如く盡きがたく其の性元の如く變化多し、故に彼が論じ來る各の問題は各々新思想を受取り、新問題出る每に彼が新思想を引出さしむるの導火とはありたり。

其文章は輕薄にあらず極めて嚴重なり、其言語は其寫さんとする實物の如く、其文躰は其書かんとする問題の如し、彼は作文躰の尤も異種ある尤も變化多きものを結付け、尤も卑下なる言語と尤も高尙なる言語とを結合し、其の觀念の廣、强、重を現わして有力を證し、只だ讀者を眩惑せんとするが爲にあらずして、感情想像の激昂する所ろ意ならずして痛論す、蓋し彼は其問題自身によりて荷ひ行かれしものなり、故に彼は其文章を美しくし華やかにする事等は一切心力の自働する所ろに放任しつゝ、只だ尤も眞實なる、尤も有の儘なる、尤も十分なる、尤も有力なる敍事を爲し、讀者の心に最强の感じを銘するを第一とせり、彼は化學者が燐を燃して細美なる光色を發する如く只だ妄想の地方に浮み居る輕き蒸氣に火を點じて美を發せんと願はず、寧ろ硬固なる硅石を强打して電火を發し其の想像の爐中に入て尤も固きものを溶解せんとを欲す、故に彼が想像の車は古く廢れたるが故に燃ゆるに非ず其の軋るとの急激なるが故に燃ゆるなり、又彼が文章は其結合の餘りに意外斬新にして、又其の比較の非常に有力なるより面白き也、彼が文才によりては何如に反對に何如に調和しがたく見えしものも同一味に合和せらる、彼は其美くしと

思へる者を彼處此處より拾ひ出すにあらず惣ての雜物を混合せしめ其の混合衝突するの力によりて發熱せしめ溶和せしむるなり、世上滔々たる流行の文躰は假餝的通常的なり、ポルクの文章は倣ひがたき有力なり創造なり。

ポルクは冗言し重複するものにあらず、彼もし繰返して言ふとあらば、其觀念の不足なるにあらず觀念を現出するの言語なきが故也、彼に一定の文躰なし時に隨つて變ず、問題の變ずると共に變ず、所云る製造的の文章に至ては其調子唯一つなり、用ゆる所ろの言語亦た一類せり、ポルクに於ては俗語なく雅語もなし、用ひ來りて一篇の文章とすれば惣べて之れ立派なり。

思ふに最強最美の文章は德善の根に發せざる可らず、浮華虛空の製造文に至つては吾れ嘔吐するも忍ばず。

小説

○あるのん物語（其七）

美妙齋
たより合譯

もはや是までと私はわせなすの手をとりながら眷屬に向ひ

「みなさん、左樣ならば、　もう私しには父といふものが無くなりましたが、しかし唯私を產んで下さッたゞけの阿父さんにも宜しく御暇を申し、そしてまた此上阿父さんの子に私のやうなものが出來ぬやうにと祈ります。阿母さん、御なごりをしさに私は貴母の御召の端へなりと接吻もいたしたうございます。が、この私の唇——一度あなたの御胸から命の水を吸つた唇——も既に汚れて居るからには迚も今更御靴の尖にでも觸れる事は出來ません。たゞ、それ故、小兒のやうに御前へ平伏して切めて一言御暇ごひを——けれど、また、それを言ふ口もまた汚れて居て！

たゞ此心だけは眞です。かはらぬ昵じみと移ろはぬ愛情は無限のこと。この上とも風も眠り、海も濤かぬ晴れの日を御過ぐしになるばかりが望です。」

辛うじて是だけの暇乞をして居る内に兄弟どもの目はいつか濡れました。母は猶更、はや聲を揚げて……

思ひ切ッてわせなすと手をたづさへ、毛物の跡に跟いて後ろを見かへりがちに來ると、やがて母は——たちまち追ひ掛けて來て私を抱きました。

無言で抱きかへした私。

と言ふ間も無く、つゞいて兄弟ども〻追ひ駈けて來て、もがくを無理に母を離し、じやふエすが母を抱き上げました、

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

親が子を抱くやうに。

で、これが一生のわかれとなッたのです！

　進まぬ足で覺束なくも旅枕を結び出しました。やうやくの事で水に殘された木が見當ッたまゝ其處に泉さへあるのを幸ひ、ひとまづ足を休める事としました。

　枝を集めて小屋を結び、弓も矢もこしらへました——弓弦はわせなすが髮の毛を綟ッて作ッてくれたので、日にかざすと火の糸のやうに見へました。猶私は椰子の纎維から糸を取ッて網を綯り、それで泉の魚を取りなどして、それからはわせなすを唯一の神とあがめて、世に類もあるまいと思はれる程に愛して居ました。

で、ある日私が餘外から歸ッて見ると、わせなすは赤子を抱いて居ました。

　その子は男でした、手足も丈夫さうで且うるはしく、そして頭には厚く毛が生へて居ました。

　うれしさには私も胸がつまるやうに爲りました。身を投げ掛けて涙をながすと、わせなすは髮の毛で手早く拭ひ、うれしいのに何故泣くと私を制して、赤子を髮の毛にぐる〱包んで、そして抱いた、そのうるはしさ、肌の紅梅色もとろけて流れるかのやう、これまでにこれ程うつくしい物を私はつひぞ見た事がありません。

　母子ともよく日立ちましたが、殊に赤子はわせなすに最も育て居ました。が、わせなすは却ッて赤子が私に育て居ると言ッて居ました。

　次第に赤子も足で立てるやうになりました、母の衣物につかまりながら。

　髮は母のと違はぬ有さま、まづ黄色の蓮花に於ける金水仙のやうで、目は青く、口は紅く、見るに可愛らしさのため胸も痛むばかりでした。

　ところが、此頃はまた空で雨を含んで、草も次第に枯れるやうになり、泉の水も盡きてしまッて、早飲むものが無くなッたため赤子さへ泣き出すほどになりました。

　しばらくの間は椰子の實の中の汁をわせなすと子供との二人に飲ませてその渴きを賺かして居ましたが、半月ほど過ぎる内に終に椰子の實も無くなッて、それで空には雨の樣子もあらはれなくなりました。

鳥も落ちて來ました。空は磨いた眞鍮の板のやうに赫いて——そして宇宙はまことの寂寞！

二日たつ内に赤子も病氣になり、飲物を求めて終日泣くそのいぢらしさ！

じつと見詰めてしばらくも赤子の傍をはなれぬおせなす。

また夜もねふらぬ母親。

第五日になツていよ〳〵赤子は頼みすくなくなるのを見ておせなすは自身の生血でも飲ませやうと言ひ出しました。

おせなすの切な考もさら〳〵無理では無い、それには私もなぐさめかねて熱した土を堀ツて見ても水が出るかとためしましたが、その甲斐は些しも見えず、歸ツて見ればおせなすは泣くばかり、たゞ出もせぬ乳房を赤子にふくませて居るいぢらしさ、終に思ひ切ツたのでしやう、おせなすは私にむかひ、「とても此子は死ぬにきまツて居ます。いツそ死ぬなら貴下の御手で……」

言ひさしたばかりの心の底、聞く身は千切れるやうでした。わづかに母の手から赤子を受け取ツて私が抱く間も無く赤子は息を引き取りました。

けれどもどうして引ぎ取ツたと打ち付けに言へましやう、たゞ平常のやうにやさしく私は抱いて居た、その側にはおせなすも目を張ツて赤子の樣子を見詰めて居ましたが、しかしまだ死んだとは心付きません。

○眞才子　　麻溪居士作

中卷　（甲）

私が丁斑魚となつて水中に
音樂の美を聽くとを得ても

私は號を蝶芳と申す畵工であります。私の故郷は大坂で、十二歳の時に東京へ參り、當時有名な畵工の家に厄介になつて居ました。

私は小供の時から畵が非常に好で、小學校へ行てる時分にも、草紙や黒板へ武者を畫いたり、狐を畫いたり、花などを畫て先生に叱り付られ、不幸にも二三時間づゝ拘留されて、學校の薄闇い室の中へ立されたことも度々ありましたが、いくら叱られても是ばかりは止る譯にはいきません。紙があり筆があれば、武者の形や狐、花などが妙に目に浮むで來ます、目に浮むで來ればもう之を紙に顯さなければ堪られない程で、それから書き初めると、又其次の人物花木が逐かけて參ります。我を忘れて筆を弄んで居ると、直に後から先生の一聲——其次は鞭、打たれては痛い。痛い時には（もう畵は書きませんからどうか御免下さいまし）と、哀れ氣に先生に詫びました。詫て涙の乾かない内は、どうか斯うかいや〳〵字を習つ

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

て居ました。が一時間も經つと、また以前の武者――花――狐が、頭腦の中へ這入て來て遂に私の手をして筆を採らせます、どうしても畫が忘れられません。打たれたり叱られたりすると、何だか畫た武者――花――狐などが餘計なつかしい樣に覺へ、畫ない時にはそれがやつぱり戀しく思ふのです。家へ歸つて來ても書籍を包だ儘放り出して戸外へ出ました、出ましたが外の小供の樣に決して惡戯をしません。學校で先生に隱くして袂へ入れて來た白墨を出して、乾た地面、土藏の壁、黑塗の板壁などへ樂書を始めました。此時こそ叱られる患もなし、打れる恐もありませんから、心の儘に思考をこらして樂んで居ました。此二三時が一日の中で最も愉快な時、まるで籠を放された樂園の鳥です。ですが私の親は村の百姓ですから、決して半紙など餘計なものは買てくれません。私はせめて一度位ひ立派な白紙へ書て見たくてたまりません。が、そんな事は出來ませんから、小供心に一策を案じ出しました。其妙案は…私の持て居た讀本の中にある白紙を一枚引裂て、それに一生懸命に畫を書て、少しばかり畫の具で彩色し、翌日學校へ持て行て朋友に見せびらかして、(半紙一枚呉れゝば此樣な能い畫をやらァー)と言觸しました。すると同年程の小供は、半紙を呉れたり、筆を呉れたり、繪の具を持て來たりして、私に畫を賴む者が澤山あるのです、私の策が十分行はれたのです。ところで私は大變天狗になつて半紙二枚でなけりや畫ないの、持て來た筆が惡いのと言て、充分朋友の中では畫工ぶつて贅澤を言ふ樣になり、それが爲にまた色々な物を畫初めて、どうやら斯うやら人物は人物らしく狐は狐らしく畫ける樣になりました、實に妙なものです。

私の兩親は勿論私を畫工にする考へはないのです。が私も最早十二歲、年頃になつたら村の百姓へ養子にでもやる心組の樣に思はれました。小供心に鋤鍬を擔ぐ事がいやで、野良で日に燒けて働くのはどうしても氣に向かないのです。夫は鋤鍬を持てば、畫を書くとが出來なくなるといふので嫌なのです、只夫ばかり。實に罪のないのは私の樣な小供心です。私は叔父に連れられて東京へ參りました。處が東京の繁昌なことを見ると、實に――お玉杓子(虫)が太平洋の眞中へ投出された樣に――その廣いこと華美な事、唯もう喫驚してしまつた計です。此時です、私はもし町を步行して居て、ひよつと叔父にはぐれたら、一生涯逢れなく、行方知れずになるだろうかと思ひました。

寄書

○妾の字を用ゆべからす

鵠部散士

散士は兼て今古の婦人が自家卑遜の習として書文の間に妾の字を用ゆるを旃く賦ひたり從來妾とは禮記に出るも聘則爲妻走則爲妾とありて決して正しき妻ならざるものゝ名たるとは判然たり今日女子改良に熱心勉勵するものは志操上素より斯る不吉の字を用ゆべき理なきのみならず一夫一婦の眞理を重ずる者は如何に自家謙遜の禮に出るにもせよ語るなさへ愧づる所なり然るに堂々たる女傑諸君の錦繡文字中に此字の今猶ほ散見するあるは如何にて怪訝千萬なり去りなから婦人にして余、吾輩、吾曹、我等の字を用ゆるは何とやら習慣上温雅を失するの嫌あれば別に代用すべき文字のなきまゝ無據使用されしとなるべけれど余は常に我愛する女學雜誌中には一字の妾字を見ざるとを好むなり孔子樣は必や其名を正せんと仰せられたり如何にも名は實の賓なれは名實共に正したきとなり然に妾を(ワラハ)と云ふとは實は訓の誤にて(ワラハ)とは童の義なり標識には小童猶小君なと高貴の婦人を稱するとも見ゆる故今日も何にか好き代名詞あり妾の字を廢せんと思へども散士も未適當の字を知らず但ゝ男子が應酬の間漫りに他を崇て君と云ひ自を謙て僕と云ふあり是れ習慣上敢て怪みもせぬより考れば婦人も一般に寧ろ婢の字を用ゆべき乎去りとても牛馬に等しき名稱の妾と云字を用るよりは幾倍か高尚ならずや左りとて婢の字も餘り面白からず世の姉妹の御勘考を願ふなり、散士は屢ゝ當雜誌に寄稿を寄するに最初より決して妾の字を用ひず實は餘程困難なり御考ある兄弟姉妹は願くは散士に御教玉ふべし。

○飛て火に入る夏の虫

北越 樵婦

夏夜小蝶飛び來て燈邊に上下す、樵婦戒て云ふ愛すべき小蝶よ、汝燈光の輝々たるを望て、來て身を投ぜんとす、然れども汝が身の燈火に觸るゝの時は、汝が最大苦悶の時なるぞ、汝一時の情を認めて、行て樹陰に隠れ、二六時を經て、大陽の大光に逢はん、去れよ小蝶と、團扇を以て之を拂ふ、一去一來遂に命を燈火に喪す、樵婦憐憫措く能はず、因て一編の哀詞を述ぶ。

酒酌時造の與なしと雖も、こゝに亡蝶魂を祭て曰く、嗚呼小蝶の世に在るや、美なる羽衣翩々として、或時は机上に遊で隣坐の睡をさまし、或時は花に戯れて雅人の錦腸を動し、世益をなすと少なしとせず、今や忽焉命を燈光に亡す之れ蓋し身を以て殉死となし、世を毒するに非ざるなきを得んや、近時女學生の醜聞は、都鄙に普くして、爲に女學の前途を遮ぎらんとす、道路風説信か僞か、未だ詳に知る能はずと雖も、今の女學生は、身率先して、學問の實益を活用し、頑夫愚者をして、迷夢を覺破せしむるの責任あり、身率先して、女權擴張の策を講ずるの責任あり、身率先して、幸福なるホームを造るの責任あり身率先して英雄の原質、賢士の素才を養成するの責任あり、この數責任を負ふ所の女學生にして、何ぞ翩々として、燈火に身を燒く、小蝶の愚を學ぶが如きとあらんや、夫れ然り、然りと雖ども、風姿月の如く花の如く、學才以て世に誇るに足るの才子、佳人見て以て戀々、遂に重きを負ふの身を忘れ、醜を世上に流すもの、稀になしとも斷言す可らず、古來幾多の忠臣は身を殺して以て君を諫む、然れども徒に犬馬の死に等しき者實に少なからざりき、汝寸に充たざるの身を以て、一死能く日本女性を戒めんとす、汝の死や、古忠臣に勝る萬々、酒の酌む可きなしと雖ども、樵婦が誠心以て酌むべし、靈其知るあらば彷彿として來享せよ。

開書

○名古屋の祝會に付

橫濱 天空生

愈御健勝國家の爲に奉賀候扨我日本帝國の鐵道も愈東京神戸間連絡相成延長總計壹千哩以上には成申候由殊に喜ばしく存候當局の人々も定めて嬉しき事と推察致候而て其喜を表白する爲に明後十日全國鐵道事業に關係ある重なる人々は名古屋秋琴樓に於て一大懇親會を催さるゝ由至極結構なる思ひ付歐米各國に對しても恥かしからぬ(イヤ)名譽ある會合と存じ然其趣向を承り實に三嘆致候別事にも無之三都の最美貌を以て名ある藝妓百余名を聘し此名譽ある會席に侍らしむる一事に有之候余事と異り日本國が文明の利器と申さるゝ鐵道の延長を祝する公なる晴々しき會合の席に何事乎此始末、尤も或る止を得ざる場合にて此樣の者を聘かねばならぬと申なれば其土地にて是を聘し候ては如何にや、鐵道を利用するとは云へ意外の仕打、言語同斷、咄々怪事と申外無之退て考ふれば日本興業先進の紳士にして此の如き事を思ひ立たるゝとは、噫、嘆はしき限りの事に候、東洋貿易を奬勵すれば怪しき婦人の輸出を試み、鐵道を濫用して三都の劣等動物を名古屋に於ける日本の晴々しき名譽ある會席に列せしむ、吾人益々國家の爲に奮勵して正潔なる觀念を國民個々に抱持せしめねばならぬ樣相成申候皮相の文明吾人の大厭なる所に候御高説相伺度謹言。

新報

（此の欄内自由に轉載を許す）

○監獄の改良

其必要愈々切にして、其切なると益々悟らる、國家の爲に祝すべき也、遂に監獄吏の會議に就て、自今一層囚徒の取扱に注意すべき趣を議定したりと。此頃米國コビントンに發行するデーリー、コムモンエルス新聞に、デートリツク夫人は日本と同地との監獄を比較して太たく我國の制治を賞賛したり。成程外面より見るときは器械的に能く整理したらん、然れども之れのみは以て足れりとすべからず。

○哲論者の政論

政論第一號を讀む、兆民生の自白する所ろ何んぞ巧妙玄幽なる、而して一種の翻味祈味高く天外より來る、今日の政論界大抵一調子なり、たまく破調あるに耳を欲つれば之れ飄暴轟生の琴を破るなり、此時に當りて希臘の論者ハープを以て來り、支那の愛國者簡編を以て來る、吾人の美感踴躍して止まざる也。

○浮雲

第三篇の三回都の花第十八號に出づ、文章益す検束、而して一句よく心理を穿鑿するもの三々五々として存す、四迷君の批評的觀察力に至つてはいよく敬服すべし。只腹が立つ時の工合、只己れに逆らつて見たい時の情、果ては泣出したくなるの感、氣儘娘の具腕、江月子婦人の本色等ますく善し。著者此の筆を以て何んぞ今の英雄豪傑を寫殺せざる。

○眞美復興の兆

英國の學士會院及美術會に於て名を聞きたるアルフレツドイースト君は、今度日本美術實見の爲に渡來して去六日明治美術會の爲に一場の演說を爲せり。日本の美術を評して彼は大ひなる事に小さく、小さき事に大ひなりし。其影響は確かに歐米の粧飾を感動したれども其美術を感動するに至らず。智識は恐るべきものにあらざれば貴邦諸工のいよく需理に精しからんを望むと云る如きは、舶來せる世辭論者の常套に異なり、頗ぶる吾人を喜ばせたり、而して聽衆數百、極めて厚く拍手して其賛成を表したる、彼此皆な本邦美術の爲に祝すべき出來事なりき。

○僧侶をして還俗せしめよ

時事新報「寺門をして其本色に還らしむべし」の論說は、自づから是れ高僧の知言に似たり、云く僧侶をして清淨無垢の境界に還らしむるとは、凡そ俗事政治に關らざる部分は政府との關係を斷絕し、全國の人口に比して僅々たる僧侶は恰かも之を員外として特別の戶籍を寺院に附し、兵役の如きも固より之を免して修業に力を專ばらにせしめ、堂宇の敷地は墓地同樣に之を無稅にするも妨げなかるべし、又僧侶の身分は其寺門の内に勝手に等級を定めしむること學校生徒の等級の如く相撲の番附の如く毫も政府の知る可き所ろに非ず、俗界の政府より之を取扱ふに其僧卒何如の問題もあるべきなれども是は百千年來の舊習慣に從ひ元より先方同志の身分なれば時としては王侯の如く時としては乞食の如くし、唯衆生の歸依不歸依に從て自然に僧卒を爲べきのみ」と、吾人は之にて今の俗僧が清淨無垢に還るべしとも思はず、然れども俗僧の更に俗化するを防ぐは蓋し此外に須なけん。

○敎育ある女子にして安全なる夫婦併立の生活を遂げんとするには何如なる男子に嫁すべき、の續き。

國の基第四號に出でたり、第三號の所論とは餘程の相違あり、文章の波瀾起伏至妙なりと云ふべし。

○貴女之友は改良したり

知友松山傳十郎君端書を寄せて云く、

上略、再たび貴女之友編輯擔任致候都合に極り候に付相變らず御助勢の程云々不及ながら日に月に改良（圈點元の儘）する考に御座候先づ手初として第五十八號より表紙欄內等多少改良（亦如元）致候間云々

即はち第五十八號を見るに成程著しく改良せられたり、喩へば梅雨晴れて快天を見るの心地す、思ふに美果の充實すると亦之よりいよく多かるべし。

○道は必らず行わる

レビツト夫人がシヤムのバンコツクに在りしとき、其のトラクト（小品論）を同國の語に翻譯したるものありし處ろ、同地の或る僧之を見て大に感歎し其意を吟じて詩に作りたり、然るに活版を所有する同地著名の紳士某之を見て更に亦感歎し、僧ひなく五百部を印刷して廣く配布し、其後更に亦た之を增刊して大に賣り廣むると云へり。

○英國主相再たび女權論を主張す

囊に女子參政權の事を論じて大に歐洲を動かしたる今の英國總理大臣ソウリスベリー侯は、此頃プリユローズ、レギウに對する演說に於て更に前說を復證して曰く

現今反對を懷むる種々の新説論の中に於て、大凡そ輓近の政治上の運動、特に此政派の運動に着目したるものは、十九世紀後四半紀の最大幸福なる改良中の一は、即はち女子が政務政論に關係したりと云へるの一事なるを疑ふものなけん。奇警なるポールモル、ガセツトは之を評して曰く

實に此れ近世最大幸福なる改良の一つなる哉、此の語ばが大英國主相の口より發したりと思ふときは其味甚はだ强よし、特に女子を州會議員とするの權あり や否やの議案に關して、議論の衝節にすら頓着なく、只無雜作に之を一抹殺し去りたる議院の主領たる人の口より發したりと思ふ時は、此語更に尤も强き味わひあり。

此れ近頃上院に於て彼議案を二十三票に對する百〇八の多數にて除去したるとを冷嘲せるなり。此等前后の論評以て英國政治界の進向を推知へべし。

○英國女子二政派

英國に女子の政派倶樂部二つあり、一をプリムロース、レギウと云ふ會員女子五萬人。一を女子リベラル、フエデレーションと云ふ會員三萬四千人。先は保守黨に傾むき、後なるは改進黨に通ず、前項に記せるソウリスベリー侯が演說したるは即はちプリムロース政派の會にして、曩きにグラツドストン夫婦金婚節の祝ひはグラツドストン夫人に良人の寫眞を挿入したる胸飾りを贈りたるは即はち後の女子改良政派の會なり。

○奴隷解放者の末期

ハリエツト、ビーチヨル、ストウ自から記して曰ふ、余れ此頃ろいよく若衰して只今ま讀みしとすら覺えず、余が心は白紙の如く何も染まらず、左れど只一事を確く覺悟す、即はち何如にもして人を愛せんと、彼の道路の塵に埋もるゝ尤も汚わしき乞食をも均しく愛したりと、余が一生は夢の如し、余はすでに働らきを了り、完き休みと自由との賜を受く。古しへの詩に、昔し婦人あり

其人常に勞れてありき、蓋は一つの助けだになき家に住ひたればなり、と云へるに善くも似たり、然るに彼婦人遂に末期に至り最后の骨折として兩の手をたゝみて云く、嗚呼愡べて、愛すべき愡べて、心地よき愡べては最早永久になしと、然るに人あり之に問ふて君は左らば復活を信じ玉わぬかと云ふ、彼女驚ろきしさまにて、何に復活をと、過ぎ去りし一生は夢の如し、左れど未來は何條夢ならめやと。余の思ふ所ろ今ま亦た實に此の婦人の如し云々」淸く人世の義務を盡したる人の終り樂しきかな。

○第二の聞えざる解放者

今のシヤム國王即位するや直ちに數百萬の奴隷を解放したるとは、何如にも意外の美事として全歐ともに反つて喫驚したるとなるか、ハミルトン、ウイルコツクス氏は此頃の紐育世界新聞にて其事由を記るして云く、此は元と一婦人の感化に根づく、先帝マハ、モングカツトの夫人及其子を保護するの任を負ひて英國より同所へ雇はれたるアンナ、ハルリエツテ、レヲノウエン女史は兼て「シヤム朝廷の英國保姆」と稱せられし賢女なるが、此女史今帝の幼けなきときより自由の理を吹込み深く奴隷を惡むの性狀を養成したりしかば、此の教ゆる所ろ遂に今日に發して此如き美大事業を成就せしむるに至りしと。

○第二レビツト夫人

中川ゆき

萬國婦人禁酒會の第二世界遊說者なるゼツシイエアツカルマン孃は曩きに布哇を經て我國に遊說せらるゝ筈なりしが船便の都合に因りて布哇ホノルヽを發しサモア島を經て目下新西蘭ウエルリントン府に滯在せらるる由は六月六日發兌の「ユニチンシグナル雜誌上に孃の報告を記載するを以て知るとを得たり亦同雜誌は welcome Frno Japon と題し紀伊和歌山在留のハドソン夫人がアツカルマン孃をして我日本に遊說されんとを希望せる旨の寄書を揭載せり牛憶ふに我矯風事業に熱心せらるゝ姉妹も孃の遊說を希望せらるゝならん然ど孃は來る九月廿八日米國シカゴに開く米國婦人禁酒會の大會に臨塲せらるゝ由なれば本年中は我國に遊說せらるゝとは難からんか今女學雜誌記者に紙上の一隅の割愛を乞ひ同氏渡來を待たるゝ姉妹の方に告ぐ。

○御婦人の目方

太とりしが善きや惡しきや、丈高きが善きや惡しきや、躰だ重きが善きや惡しきや。男ならば直ちに答へられる問題にて女性には早速に答へがたき議案なるが、此頃の米國流行雜誌(フハツション)に西洋婦人並々の目方を表示したり、

身の丈け五英尺の時は	目方一百英斤
五英尺一英寸	一百六英斤
五英尺二英寸	百十三英斤
五……三	百十九
五……四	百三十
五……五	百卅八
五……六	百四十四
五……七	百五十
五……八	百五十五
五……九	百六十三
五……十	百六十九
五……十一	百七十六
六	百八十六
六……一	百八十六

而して一英斤とは凡そ百二十目一斤。一英寸とは凡そ八分四厘。一英尺とは凡そ一尺余。故に五尺の女の方は大抵目方百斤あるべき筈也。

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

庀 七

○女子の弁論　雄式に臨み女子が演説すると益々行わる此頃も有名の記者ゼンニージューン(クローリー夫人)は其頁人の雄場にて演べ、學士アンナパラッド女史は或る學術の弁むりに同じく演説したり。

○米國公使の夫人　築地居留地なる米國公使スウヰフト氏の夫人は渡來後本邦上流婦人の言語及び女禮式等を修習されんと兼て其人物を尋ね居られし處今度麴町區番町なる櫻井女學校教師倉林よき子を月給六十圓にて教師に傭ひ入れたる由。

○入學奬勵　華族女學校は皇后陛下の厚き思召に依り華族女子のために設立せられしものにて目下入學の生徒も多き事なるが尚同校にては來る九月生徒を募集せらるゝに付ては學齢女子之ある向は此際成るべく入學致させ候樣にと岩倉宮內省長官より去る二日各華族へ諭達されたり。

○女子の海外留學　本鄕區湯島天神町寄留福井縣平民中山甚兵衛三女ふゆ(十六)孃は學術修業の爲め向ふ五箇年間英國へ留學せんとて旅行劵の下附を願ひ出でたりと云ふ

○華族女學校　日本土木會社の請負にて障てより麴町區永田町三丁目(赤坂御門內)へ新築中の華族女學校は既に全く落成したるに付き去る六日四谷仲町の舊校より移轉したるよし。

○尼僧學校　淨土宗にては曩に全國へ七箇所の尼僧學校を設置する事となりしが其場所は東京、京都、福岡、山口、長野、愛知、宮城の二府五縣と確定したるよし。

○看護婦人會の休會　日本赤十字社の篤志看護婦人會へ暑中即ち本月より九月まで休會するよし。

○囚徒待遇に關する內訓　過般開會されし典獄會議に於ても囚徒の待遇へ及ぶべきだけ深切に扱ふべき事に議決されし由なるが鋼此ほど其筋にては各地方官に向て從來とて看守押丁等の囚徒を待遇するに深切なるべき事は素よりの事なれ共往々苛酷に失するやの風說もなきにあらざれば向後は一層その待遇方に注意し旣決未決の差別なく何れも其待遇方は成べく鄭重深切に爲し決して苛酷に失するが如きことなき樣注意すべき旨の內訓を發せられしやに聞く。

○レース　京橋區日吉町の東京府レース製造所にて製造する同品は去る十九年中佛、獨、英、白等の各國へ見本を送りたりしが當時へ單に技術を示すの趣意にて一ヤール金十七八圓以上の優等品を送りし故彼國にても品位を賞賛せしも餘り高價なりとて販路へ未だ開けざりけり、夫より種々考案の折柄佛國にては器械にてレースを製造する事を發明し一ヤール金四五十錢位に製出したるより歐洲への販路の目的を關ちたるが本年に至り佛國よりの報に手製なれば一ヤール金五六圓のものなれば需用者のあるべしとの報ありしより同製造所にては今度一ヤール金五圓以下三圓五十錢位を目的に十二種のハンレーレースを製造して佛英兩國へ送る由なり。

○婦人の團結　大坂の松永其香、箕浦子、岡山の景山英子なるを始め八九名のますら婦達は男女元同權なり男子の團結あるにからは女子も亦た之に對して團結を作らざるべからずなどといふ譯か來月中旬を期し關西婦人大懇親會を大坂に開き關西の壯女(新しい熟字)を集て一大宴會を催し女子の擴張女子風俗の改良等を目的とし關西婦人大同會を設立するの目的なる由

○入院中の娼妓外出の事　本年六月警察令第廿三號を以て定められたる娼妓黴毒檢査規則第十四條に黴毒院に入りたる者は治院の爲め警察署檢査所に出頭し檢査を受たる場合の外許可を受けずして院外に出るを得ずとあるが其外出の許否を決するは所轄警察署に於てする事と心得べき旨訓令甲第四十二號を以て貸座敷所在地警察署へ達したるよし。

○婦人攻務會　宮城響我氏其他女教師貴婦人等の發起にて婦人攻務會を設けんとし昨今用意中のよしにて既に米國婦人三名を聘するの約整ひ當分は編物裁縫篩品の三科を置き追ては英語、音樂等の科をも加へる目的なりと。

○德川公父子上京　靜岡なる德川從一位公には去る三日上京になり直ちに千駄谷の本邸へ着され夫と同時に公の令孃鐵子、絲子、悅子、國子、常子も上京されたるは何れも華族女學校へ入學の爲なりと。

○滋賀縣私立高等女學校　にては小學唱歌敎員たらんと欲するものゝ爲め尋常師範學校の程度によりて唱歌速成科を置き修業期を六ヶ月以內とし臨時傳習を開きしと云ふ。

○一婦一夫の建白　京都の清水豐子は一夫一婦の建白書を元老院に呈出せんとて彼れ是れ奔走計畫中なりしが此程同意を表せし女子百三十餘名に達せしを以て不日洛東有樂館に於て京都女子大懇親會を開き協議の上總代二名を選出して東上せしむる都合なりと云ふ。

○工女の同盟罷工　甲州北巨摩郡韮崎驛の某製糸場の工女は製糸の檢査嚴重にして僅少の過失にも罰金を取らるゝを不滿とし此程同盟罷工したるよしの報あり。

○娼妓學校　奈良縣奈良町大字木辻に於ては去十日より娼妓學校といふを設立し同地の娼妓百三四十名に裁縫並に習字算術等を敎授する筈なりと最も右開校の上は登校の娼妓に係る花代は悉皆廢止するの姿となることならんとて中には迷惑に思ふ貸席主人もありとのことなり。

朝野新聞

本社今般左の問題を掲げ廣く懸賞文を募る

懸賞文廣告

本邦女子教育論

一募集の方法手續は左の如し
一草稿は楷書にして字畫正しきを要す紙數は多きも十行二十五字詰にて五十枚を超ゆ可らず
一期限は七月一日より九月十日迄と定む
一投稿者は明かに其住所姓名を記載す可し若し紙上に本名を掲ぐるを厭ふものは別號を添記す可し
一本社は一々投寄の草稿を審査の上左の等級に分ちて賞品を贈呈す可し

第一等 金三十圓
第二等 金十五圓 本社新聞半ケ年分
第三等 本社新聞一ケ年分

東京銀座四丁目八番地 朝野新聞社

演說會（來ル二十日午後三時ヨリ 於當會堂）

女子ノ家庭及ビ學校敎育ニ付キ二三ノ意見
辨士 先英國高等女學校敎授ボルヤン氏

本鄕 壹岐坂會堂 婦人會

四竈訥治先生撰曲

選曲唱歌集

第二集以下近刻

一集定價金十錢 郵税金四錢

四竈先生の音樂に熱心にして且つ長ずるは皆人の知る所なり本書は最も優美善良なる曲を摘み撰集せられしものなれば苟も音樂を學ばんと欲する才子佳人はこれに依りて切磋琢磨し給はゞ眞佳の妙興を得るに至るべし請ふ一本を購ひて其言の誣ならざらんことを知り給へ

發行書肆 東京日本橋區若松町 榊原友吉

特約販賣所 銀座四丁目 博聞社
通一丁目 大倉書店
南傳馬町 目黑支店

木村熊二、田口卯吉兩君序○關輪正路君纂著

女子必携 今世ひめ鑑 全一册 賣價四拾五錢 郵税拾四錢

凡そ當世婦女子の心得べき承知すべき質問すべき箇條は大抵記載し有之候蓋し昔の「ひめ鑑」の重寶なりしとを御存知の方々は此開化したる當世のひめ鑑も亦同樣に助けあるとを想像し玉ふべし

佐々木豐洲女史譯

婦人言論の自由 全一册 賣價八錢 郵税四錢

右は婦人の言論に關するとに付き切論せられたるものあれば姉妹方の必ず閱讀せらるべき價値あるものあり

發兌 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

交詢案內

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十二 下婢 年齢廿歳ゟ五十歳迄の基督信者を雇入度者あり

十五 召使 家內の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も讀書算筆を學びたき志あるものを望む

十六 召使 重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御內なり

二〇 取締 基督教信徒にて年齢三十才四十才なる獨身の婦人にして女學校ヿ寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を備入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者

二一 中働 年齢廿五才位にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり

●雇はれたき方（乙）

六 奉公 地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七 裁縫 年齢廿三にして家內の手助けとならんが爲め內職に裁縫に雇へれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三 教師 栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む

一九 召使 裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし

二四 奉公 年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし

二五 裁縫 裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇はれたし

二八 奉公 普通小學科卒業の者にて（年齢二十二才）產婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に產婆術を學び度ものあり

二九 奉公 年齢十四歳にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き每日四五時間英語學の修業致したし

三〇 通辨 年齢 廿四歳にて貴 婦人方の 英語の通辨として雇はれ度ものあり

三一 奉公 廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家內の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり

發兌

七月。六日 十三日 二十日 廿七日
八月。三日 十日 十七日 廿四日 卅一日
九月。七日 十四日 廿一日 廿八日
十月。五日 十二日 十九日 廿六日

定價

一册。六錢 郵稅。一錢 （但府內無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。十錢 （同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行 一回 （廿七字詰） 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8 Hiyoshichō, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄕區元富士町盛春堂○同本鄕區春木町二丁目解明堂○同本鄕四丁目文春堂○橫濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年七月十一日印刷
明治二十二年七月十三日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

遞信省認可